

鴻の思い出 その一

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

天 王の鎌田和子さんと広瀬昭子さんは共に昭和9年生まれの同年。親戚でもあり、中学の時からお互いに「あきちゃん」「和子さん」と呼び合っている大の仲良しです。お二人に子ども時代の鴻にまつわる話をお聞きました。

天王沖は遠浅で、夏になれば女の子も水遊びだったなあ

鎌田 私は生まれも育ちも天王だけど、あきちゃんは東京生まれ中国の北京育ち。終戦から2年後の昭和22年、中学2年生の時にお母さんの実家のある天王に引っ越して来た。それからだね、一緒に遊ぶようになったのは…

広瀬 そう、父が満鉄の技術者だったので北京で育ちました。終戦になっても父は中国人技術者の先生役として北京に留め置かれ、教え終わるまで日本には帰さないといわれ、日本に帰るのが遅くなってしまいました。それまでは北京の日本人学校に通っていたので、北京の学校からの転校生。中学の先生が気を使って和子さんと同じクラスにしてくれたので、すぐにクラスにとけ込めました。私は金魚のフンのように、いつも和子さんの後に付いて歩いていました。

鎌田 あの頃は鴻もきれいで、夏になれば子どもたちは男も女も関係なく水遊び。女の子もグンジ(ハゼ)踏みをして、けっこう獲ったもんです。

広瀬 私はまったく泳げなかったので、膝より深い場所へは行けなかったけど、水遊びは楽しかった。遠浅で砂底なので歩きやすいし、素足に砂の感触は気持ち良かった。和子さんは陸上部に入っていたけど泳ぎも達者。男の子たちと一緒に八竜橋の欄干から飛び込んだり、船の通る深みに立ち泳ぎをしたり… 私には信じられなかった(笑)。

鎌田 近所の遊び相手は男の子しかいなかったもので、男と同じような遊びをしていて、それが普通だと思っていた。冬のスガ(氷)渡りは忘れられない。鴻の上を歩いて塩口の方まで行くつもりだったけど、途中で氷が割れて冬の鴻にドボン。一緒に行った男の子に助けてもらったこともあります。あの時は本当に寒かった(笑)。

広瀬 和子さんのお父さんは北海道にニシンの漁場を持っていた網元で、春先になれば地元の男衆をたくさん連れて北海道にニシンを獲りに行っていた。和子さんは、お父さんに似たのかも…(笑)

